

Qí zhēng yě jūn zǐ  
其争也君子

其の争うや君子なり

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



孔子は『論語』の中で次のように言っています。「君子矜而不争 (Jūn zǐ jīn ér bù zhēng) (君子は矜きようにして争わず) <衛霊公第十五>。君子たるもの、誇りは高く、争いごとほしないものである、と。「矜」には矜持きようじという語が示すように、自尊心と自制心、両方の意味があります。どちらに解釈しても通りますが、要はそれ故に争いごとほしない、ということです。

周代には、君子たしなの嗜みとして、六つの項目が挙げられていました。「礼れい」「楽がく」「射しゃ」「御ぎよ」「書しよ」「数すう」の六つです。これを《六芸りくげい》といいます。「礼」は礼儀作法、立ち居振る舞い、「楽」は音楽、「射」は射的しゃてき、矢を射ること、「御」は御車ぎよしゃ、車馬の扱い方、「書」は書写、文字の書き方、「数」は計数、計算。以上六項目です。《芸》とは芸事、カルチャーのことです。この中で「射」は「御」と共に、もともと戦時に敵と戦う為のものでしたが、後に儀礼化し、カルチャーの一つに数えられるようになりました。同時にその技量の優劣が、他の五項目と並んで人材登用の目安にもなっていました。そのため立身出世を求め人たちの間で競争が激化し、孔子の活躍した春秋時代には、必要以上に闘争心を煽る要因にもなっていたようです。

これに関して孔子は『論語』の中で次のように言っています。「君子无所争，必也射乎？ (Jūn zǐ wú suǒ zhēng, Bì yě shè hū?) (君子は争う所無し。必ずや射か) <八佾第三>。君子は争いごとほしないものだ。もし争うことがあれば、それは射的の時だろうか、と。射的は重要な儀式の一つだから、日ごろから腕を磨き、その場に臨んだ時には常に最善を尽くさなければならない。その結果として技量の優劣を争うことになる。君子たるもの、これ以

外のことで無用の争いはしない、というわけです。しかし勝敗の結果がその人の一生を左右しかねないとなれば、勢い競争は過熱します。そうなると儀礼としての本来の意味は失われます。それを防ぐためにはどうするか。孔子はさらに続けます。

揖让而升下，而飲。其争也君子 (Yī ràng ér shēng xià, ér yǐn. Qí zhēng yě jūn zǐ) (揖讓ゆうじょうして升下し、而して飲む。其の争うや君子なり)。互いに譲り合いながら競技台を上り下りし、最後は台上で酒を酌み交わす。これぞ君子の争いというものである、と。

揖讓とは、両手を組んだまま前方に差し出し、拝礼すること。譲り合いの気持ちを表します。相手の人格を尊重している証でもあります。升下とは競技の為に設けられた台を上り下りすること。飲むとは友情の印として杯を交わすことです。これを行うことで、勝敗の結果が後に悪影響を及ぼすことを防ぐわけです。

射的という儀礼の本来の意義は、人間同士の対立抗争を抑え、互いの技量を尊重し合って共存する所にあります。混迷の続く時代にあって、孔子はこの精神を復活させることを望んでいたのです。

ところで日本には「礼に始まり礼に終わる」という格言があり、相撲や柔道、剣道、弓道等、武道の世界でよく使われます。この様なしきたりは一般に日本古来のものと考えられがちですが、その源は、やはり『論語』にありました。弓道では、形は違っているかもしれないが、今でも「揖」の作法があると聞きます。古臭い、時代遅れ、と言って嫌う向きもありますが、二千五百年の伝統、平和への悲願を考えると、そう簡単には捨て切れないものがあります。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)